

家畜衛生週報

ANIMAL HYGIENE WEEKLY

No.3899 農林水産省消費・安全局 畜水産安全管理課、動物衛生課 2026. 4. 13

・北海道で確認された高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜（国内22例目）の遺伝子解析及びNA亜型の確定について……………	113
・宮城県で確認された高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜（国内23例目）の遺伝子解析及びNA亜型の確定について……………	114
・家畜衛生レポート（奈良県）……………	114
・家畜衛生情報 令和7年（1～12月分）……………	116
・動物用医薬品成分再審査結果通知……………	120

☆北海道で確認された高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜（国内22例目）の遺伝子解析及びNA亜型の確定について

（令和8年4月1日付けプレスリリース）

北海道千歳市で確認された高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜（国内22例目）について、動物衛生研究部門が実施した遺伝子解析の結果、高病原性鳥インフルエンザの患畜であることが確認されました。また、当該高病原性鳥インフルエンザのウイルスについて、NA亜型が判明し、H5N1亜型であることが確認されました。

1. 概要

- 北海道千歳市の農場で確認された高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜（国内22例目、3月25日疑似患畜確定）について、動物衛生研究部門（注）が実施した遺伝子解析の結果、高病原性と判断される配列が確認されました。
- これを受け、農林水産省は、「高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに

関する特定家畜伝染病防疫指針」に基づき、当該家畜を高病原性鳥インフルエンザの患畜と判定しました。

- また、当該高病原性鳥インフルエンザウイルスについて、動物衛生研究部門における検査の結果、NA亜型が判明し、H5N1亜型であることが確認されました。

（注）国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究部門：国内唯一の動物衛生に関する研究機関

2. その他

- 我が国の現状において、鶏肉や鶏卵等を食べることにより、ヒトが鳥インフルエンザウイルスに感染する可能性はないと考えております。
https://www.fsc.go.jp/sonota/tori/tori_infl_ah7n9.html（外部リンク）
- 現場での取材は、本病のまん延を引き起こすおそれがあること、農家の方のプライバシーを侵害しかねないことから、厳に慎むよう御協力をお願いいたします。特に、ヘリコプターやドローン

を使用しての取材は防疫作業の妨げとなるため、
厳に慎むようお願いいたします。

- (3) 今後とも、迅速で正確な情報提供に努めます
ので、生産者等の関係者や消費者は根拠のない噂
などにより混乱することがないように、御協力をお
願いいたします。

3. 参考

北海道における高病原性鳥インフルエンザの疑似患
畜の確認（国内22例目）及び「農林水産省鳥インフ
ルエンザ防疫対策本部」の持ち回り開催について
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/
douei/260325_1.html](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/douei/260325_1.html)

☆宮城県で確認された高病原性鳥インフルエン ザの疑似患畜（国内23例目）の遺伝子解析及 びNA亜型の確定について

(令和8年4月1日付けプレスリリース)

宮城県角田市で確認された高病原性鳥インフルエ
ンザの疑似患畜（国内23例目）について、動物衛生
研究部門が実施した遺伝子解析の結果、高病原性鳥
インフルエンザの患畜であることが確認されまし
た。また、当該高病原性鳥インフルエンザのウイル
スについて、NA亜型が判明し、H5N1亜型である
ことが確認されました。

1. 概要

- (1) 宮城県角田市の農場で確認された高病原性鳥
インフルエンザの疑似患畜（国内23例目、3月26
日疑似患畜確定）について、動物衛生研究部門
(注)が実施した遺伝子解析の結果、高病原性と
判断される配列が確認されました。
- (2) これを受け、農林水産省は、「高病原性鳥イ
ンフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに関
する特定家畜伝染病防疫指針」に基づき、当該家
きんを高病原性鳥インフルエンザの患畜と判定し
ました。
- (3) また、当該高病原性鳥インフルエンザウイル
スについて、動物衛生研究部門における検査の結
果、NA亜型が判明し、H5N1亜型であることが

確認されました。

- (注) 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研
究機構動物衛生研究部門：国内唯一の動物衛
生に関する研究機関

2. その他

- (1) 我が国の現状において、鶏肉や鶏卵等を食べ
ることにより、ヒトが鳥インフルエンザウイルス
に感染する可能性はないと考えております。
https://www.fsc.go.jp/sonota/tori/tori_infl_ah7n9.html (外部リンク)
- (2) 現場での取材は、本病のまん延を引き起こす
おそれがあること、農家の方のプライバシーを侵
害しかねないことから、厳に慎むよう御協力をお
願いいたします。特に、ヘリコプターやドローン
を使用しての取材は防疫作業の妨げとなるため、
厳に慎むようお願いいたします。
- (3) 今後とも、迅速で正確な情報提供に努めます
ので、生産者等の関係者や消費者は根拠のない噂
などにより混乱することがないように、御協力をお
願いいたします。

3. 参考

宮城県における高病原性鳥インフルエンザの疑似患
畜の確認（国内23例目）及び「農林水産省鳥インフ
ルエンザ防疫対策本部」の持ち回り開催について
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/
douei/260326.html](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/douei/260326.html)

☆家畜衛生レポート（奈良県）

奈良県家畜保健衛生所

はじめに

牛ボツリヌス症は進行性弛緩性麻痺を特徴とする
中毒症であり、C、D型、および両者の遺伝子配列
が混在したC/D、D/Cモザイク型の毒素遺伝子を
保有する*Clostridium botulinum*が原因となる。発
生機序は、飼料中で菌が産生した毒素を牛が摂取す
ることで発生する食中毒型と、牛が摂取した菌が消
化管内で毒素を産生することで発生する感染型があ
る¹⁾。今回、大規模肉用牛農場において牛ボツリヌ

ス症による大量死事例に遭遇したため、その検査の概要を報告する。

材料および方法

1 発生農場

当該農場は発生当時肉用牛約1,600頭を飼養し、牛舎は広大な敷地内に三つのエリア（A、B、放牧場）に分かれて存在していた。各エリアはそれぞれ約150~300m離れている。黒毛和種には主に牧草と配合飼料を、肉専用種等には牧草およびエコフィード（もやし、おから、米粉、漬物粕など）を主体とする混合飼料を給与していた。なお、本農場は平成27年度にもD/Cモザイク型毒素による牛ボツリヌス症の発生があった²⁾。

2 発生経過

令和5年3月30日早朝、牛100頭以上が症状なく急死したと通報があり、緊急立入りを実施した。エリアAにおいて混合飼料を給与していた牛で大量の突然死、後駆麻痺などの症状を認めた。一方で牧草と配合飼料のみを給与されていた群では発症牛はみられなかった。

混合飼料を給与していなかったエリアBと放牧場においても、5日目以降から起立不能の症状や死亡が見られはじめた。最終的な死亡頭数はエリアAで618頭、エリアBで11頭、放牧場で5頭だった。死亡頭数の推移は図1に示す。

3 病性鑑定

1) 初動と採材

現地到着後は口蹄疫と炭疽の可能性を否定して

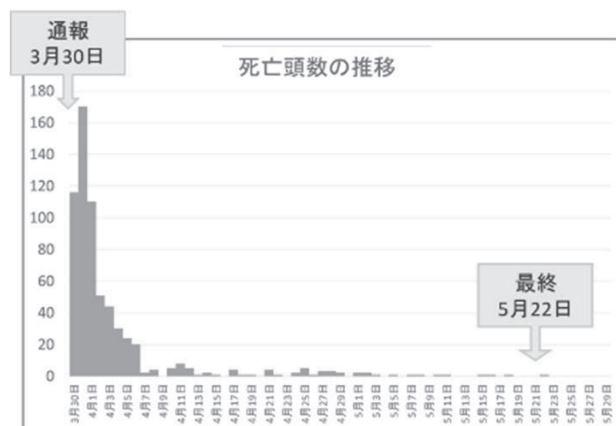


図1 死亡頭数の推移

から症状の観察と採材を行い、帰庁後に剖検を実施した。現地での採材内容は死亡牛と起立不能牛の糞便・血液、牛床の敷料、飼槽の残飼、給与前の混合飼料、エコフィード原料（おから、液状の漬物粕）、配合飼料、牧草。なお給与前の混合飼料とエコフィード原料は、発生時に給与していた飼料（残飼）とは別ロットだった。

2) ボツリヌス検査

検体の遺伝子抽出物を用いた毒素遺伝子PCR（以下、直接PCR）を実施した。また、検体の増菌培養液を用いた毒素遺伝子PCR（以下、増菌PCR）、毒素検査（マウス接種法）、中和試験による毒素型別（マウス接種法）を農研機構動物衛生研究部門（以下、動衛研）に依頼した。

その結果、直接PCRにおいて全ての検体でボツリヌス毒素遺伝子は検出されなかった。増菌PCRにおいて、多数の牛の消化管内容物と残飼からD/Cモザイク型ボツリヌス毒素遺伝子が検出された。毒素検査にて死亡したマウスがボツリヌス症に特徴的な症状（腹壁の振動や陥凹、後肢麻痺、四肢伸展、呼吸困難）を呈した。残飼を供した中和試験ではマウスの中和反応（症状減退、生存時間の延長、寛解）が抗D型毒素血清投与マウスで強くみられ、次いで抗C型毒

表1 ボツリヌス検査結果

No.	検体	直接PCR	増菌PCR	毒素検査	毒素型別(中和試験)	
1	死亡牛	糞便 (-)	D/Cモザイク型	特徴的症状も生存		
	I 胃内容物	(-)	D/Cモザイク型	生存		
2	死亡牛	糞便 (-)	D/Cモザイク型	特徴的症状も生存		
	I 胃内容物	(-)	判定不能	生存		
3	死亡牛	糞便	D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡	中和不成立	
4	起立不能牛	(-)				
5		(-)				
6		(-)	D/Cモザイク型	生存		
7		(-)				
8		(-)	D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡		
9		(-)	D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡	中和不成立	
10		(-)	D/Cモザイク型	生存		
11		(-)	D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡	中和不成立	
12		(-)	D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡	中和不成立	
13		(-)	D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡		
14		(-)	(-)	特徴的症状を呈し死亡		
15		(-)	D/Cモザイク型+D型	特徴的症状を呈し死亡	抗C型毒素血清で中和成立	
16		(-)	(-)	特徴的症状を呈し死亡		
17		(-)	(-)	特徴的症状を呈し死亡		
18		(-)	(-)	特徴的症状を呈し死亡		
19		残飼		判定不能	特徴的症状を呈し死亡	抗C・抗D型毒素血清で中和成立 (抗D型→抗C型の順に寛解)
20			(-)		生存	
21				判定不能	特徴的症状を呈し死亡	中和不成立
22			D/Cモザイク型	特徴的症状を呈し死亡	抗C・抗D型毒素血清で中和成立 (抗D型→抗C型の順に寛解)	
23	混合飼料	(-)		生存		
24			判定不能	生存		
25		(-)		生存		
26	おから	(-)		生存		
27		(-)		特徴的症状を呈し死亡		
28	漬物粕	(-)		生存		
29		(-)		生存		

素血清投与マウスで同様の中和反応が起きたことから、D/Cモザイク型ボツリヌス毒素の存在が強く示唆された。これらの結果(表1)と臨床症状や発生状況を総合的に判断し、今回の症例はD/Cモザイク型ボツリヌス毒素による牛ボツリヌス症と診断した。

3) その他の検査

病理組織学的検査、細菌学的検査、ウイルス学的検査、血液生化学検査、寄生虫検査、カビ毒検査、農薬検査を実施し、表2に示す結果が得られた。剖検した死亡牛の小腸内容物においてClostridium perfringensが規定値以上分離され、α毒素遺伝子が検出されたことから、死亡牛は牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症と診断した。

考 察

本事例は約2ヶ月間で600頭以上の牛が死亡し、総合的判断により「D/Cモザイク型毒素による牛ボツリヌス症」と診断された事例である。一部の牛では「牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症」の併発を認めた。

混合飼料を給与していた群で短期間に集中して発症していたことから、発生は食中毒型から始まり、その後、感染型に移行して混合飼料非給与の離れたエリアでも継続したものと考えられた。

ボツリヌス毒素の検出は原則としてマウス接種法により行われるが、毒素遺伝子を検出することはスクリーニングに有効であるとされている³⁾。ただしボツリヌス毒素は既知の毒物の中で最も強い致死活性をもっている⁴⁾ことから、食中毒型による発生では牛から排出されている菌量がPCRでの検出限界を下回っている場合があり、このことが今回の増菌前検体の遺伝子抽出物を用いた直接PCRで毒素遺伝子が検出されなかった要因のひとつと考えられた。そのため、スクリーニング目的のPCRには検体の増菌培養液を使用する必要があるといえる。現在は当所においても増菌培養液による毒素遺伝子PCRを実施できるように体制を整えたので、引き続き牛ボツリヌス症のより迅速な診断に努める。

表2 その他の検査結果

項目	検査方法	材料	結果
病理	剖検	死亡牛 2頭	消化管粘膜の出血と腸間膜リンパ部の腫大、心臓の点状出血、肺の充血による黒色化
	病理組織学的検査: HE染色	死亡牛 1頭分の臓器	壊死性腸炎 充血と水腫による肺胞壁の肥厚
細菌	炭疽: アスコリー反応 レビエール染色	起立不能牛の血液	陰性 陰性
	一般細菌: 5%羊血液寒天培地(CO ₂ 、嫌気) DHL寒天培地(好気)	死亡牛 2頭の 主要5臓器、腸間膜リンパ節	1頭の心臓・肝臓から、 コリネバクテリウム属菌が分離
	大腸菌: 定量培養 毒素遺伝子PCR	死亡牛の小腸内容物 2検体	10 ⁶ CFU/g以上分離 毒素遺伝子非検出
	サルモネラ: 増菌培養	死亡牛の小腸内容物 2検体	分離されず
	Clostridium perfringens : 定量培養 α毒素遺伝子PCR	死亡牛の小腸内容物 2検体 起立不能牛の糞便 10検体 飼料・牛床など 13検体	小腸内容物 :10 ⁶ CFU/g以上分離 α毒素遺伝子検出(A型菌) 糞便、飼料、牛床 :10 ⁶ CFU/g未満
ウイルス	口蹄疫	臨床検査を実施	農林水産省と協議の上、否定
	遺伝子検査(BVD、牛D9A,B,C、牛 コロナ、牛トロ、牛アデノ)	死亡牛の小腸内容物 起立不能牛の糞便	全て検出されず
生化学	血液生化学検査	起立不能牛の血液 10検体	脱水、LDH,CPK↑
寄生虫	虫卵検査(ショ糖過心浮遊法)	起立不能牛の糞便 4検体	コクシジウムオオシスト+
カビ毒	8種(ニハレノール、テオキシコハレノール、 7フキシンB1、T-2トキシシ、セアレン、 7モニシバL2,3)	飼料等 10検体	全て規制値未満
農薬	174成分	飼料等 4検体	全て残留基準値未満

謝辞

ボツリヌス検査を実施していただいた農研機構 動物衛生研究部門 動物感染症研究領域 細菌グループ 高松大輔先生、岡本真理子先生、馬田貴史先生、カビ毒の検査をしていただいた農研機構 動物衛生研究部門 衛生管理研究領域 衛生管理グループ 上垣隆一先生に深謝いたします。

参考文献

- 1) (社)岡山県畜産協会家畜衛生部:牛ボツリヌス症と予防対策、岡山畜産便り(2010)
- 2) 森山美奈子ら:繁殖・肥育農家の肥育牛におけるボツリヌス症の発生例、第48回奈良県畜産関係業績発表全文原稿(2016)
- 3) 中尾聡子ら:D/Cモザイク型毒素を産生するClostridium botulinumによる牛ボツリヌス症の1例、日獣会誌, 76, 237~242(2023)
- 4) 井上勝弘:ボツリヌス毒素, 化学と生物, vol.39, No.9(2001)

☆家畜衛生情報 令和7年(1~12月分)

1 伝染性疾病発生状況

牛	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死 廃頭羽数
<ウイルス病>			
牛RSウイルス病	22	57	3
牛アデノウイルス病	4	13	1
牛コロナウイルス病	67	201	5

牛	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
牛パラインフルエンザ	1	1	0
牛ロタウイルス病	125	272	51
牛乳頭腫	1	1	0
〈細菌・真菌病〉			
レプトスピラ症（届出以外）	1	1	1
サルモネラ症（届出以外）	17	87	5
悪性水腫	31	36	36
牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：牛壊死性腸炎）	89	101	88
牛尿路コリネバクテリア感染症	2	2	0
牛大腸菌症	35	44	24
牛パストツレラ（マンヘミア）症	104	172	58
牛ボツリヌス症	5	10	9
牛マイコプラズマ肺炎	50	74	31
牛マイコプラズマ乳房炎	3	9	3
肝膿瘍	9	9	9
伝染性角結膜炎	6	15	2
ヒストフィルス・ソムニ感染症	8	8	8
放線菌症	1	1	1
リステリア症	3	5	2
デルマトフィルス症	1	1	0
皮膚糸状菌症	4	5	0
真菌性胃腸炎	4	4	3
〈原虫・寄生虫病〉			
ピロプラズマ病（監視以外）	48	124	8
クリプトスポリジウム症	38	82	10
牛コクシジウム病	189	315	23
肝蛭症	7	16	0
乳頭糞線虫症	1	2	0
牛の消化管内線虫症	1	2	0
〈合併症〉			
●ピロプラズマ病（監視以外）と牛コクシジウム病	1	1	0
●サルモネラ症（届出以外）と牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：牛壊死性腸炎）	1	1	1
牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：牛壊死性腸炎）、牛大腸菌	1	1	1
牛大腸菌症、クリプトスポリジウム症	1	1	1
●牛RSウイルス病と牛アデノウイルス病、牛コロナウイルス病	3	4	0
牛アデノウイルス病、牛パストツレラ（マンヘミア）症	1	5	0
牛コロナウイルス病	5	30	7
牛コロナウイルス病、牛パストツレラ（マンヘミア）症	4	11	1
牛ライノウイルス病	1	1	1
牛パストツレラ（マンヘミア）症	10	22	0

牛	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
牛パストツレラ（マンヘミア）症、牛マイコプラズマ肺炎	1	1	1
牛マイコプラズマ肺炎	1	1	1
牛パストツレラ（マンヘミア）症、牛マイコプラズマ肺炎	3	7	1
牛マイコプラズマ肺炎	4	8	2
●牛アデノウイルス病と牛コロナウイルス病	5	20	1
牛コロナウイルス病、牛ロタウイルス病	3	16	8
牛コロナウイルス病、牛マイコプラズマ肺炎	1	4	0
牛パストツレラ（マンヘミア）症	2	4	0
牛パストツレラ（マンヘミア）症、牛マイコプラズマ肺炎	3	14	0
●牛コロナウイルス病と牛パラインフルエンザ、牛マイコプラズマ肺炎	1	3	1
牛ライノウイルス病、牛マイコプラズマ肺炎	1	5	0
牛ロタウイルス病	14	29	4
牛ロタウイルス病、牛大腸菌症	1	1	0
牛ロタウイルス病、牛パストツレラ（マンヘミア）症	1	1	0
牛ロタウイルス病、クリプトスポリジウム症	3	7	1
牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：牛壊死性腸炎）	1	1	1
牛パストツレラ（マンヘミア）症	11	18	2
牛パストツレラ（マンヘミア）症、牛マイコプラズマ肺炎	8	34	2
牛マイコプラズマ肺炎	8	24	0
ヒストフィルス・ソムニ感染症	1	2	0
クリプトスポリジウム症	3	12	3
牛コクシジウム病	4	7	0
肝蛭症	1	13	1
●牛パラインフルエンザと牛パストツレラ（マンヘミア）症	3	3	0
●牛ライノウイルス病と牛パストツレラ（マンヘミア）症、牛マイコプラズマ肺炎	1	3	0
●牛ロタウイルス病と牛アデノウイルス病	2	5	0
牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：牛壊死性腸炎）	2	2	1
牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：牛壊死性腸炎）、牛大腸菌	2	7	1
牛大腸菌症	5	6	3
牛大腸菌症、クリプトスポリジウム症	1	1	0
クリプトスポリジウム症	4	5	2
牛コクシジウム病	1	1	0

牛	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
●悪性水腫と 牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症 (旧：牛壊死性腸炎) 肝膿瘍	3 1	3 1	3 1
●牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症 (旧：牛壊死性腸炎) と 牛大腸菌症 牛大腸菌症、クリプトスポリジウム症 肝膿瘍 牛コクシジウム病	5 1 1 2	6 1 1 3	4 0 1 0
●牛大腸菌症と クリプトスポリジウム症 牛コクシジウム病	6 2	9 2	0 2
●牛パストツレラ (マンヘミア) 症と 牛RSウイルス病 牛RSウイルス病、牛コロナウイルス病 牛アデノウイルス病、牛コロナウイルス病 牛マイコプラズマ肺炎 牛マイコプラズマ肺炎、ヒストフィルス・ソムニ感染症 ヒストフィルス・ソムニ感染症	1 1 1 28 4 1	1 4 8 48 12 1	1 0 0 18 2 1
●牛マイコプラズマ肺炎と 牛パストツレラ (マンヘミア) 症 伝染性角結膜炎 ヒストフィルス・ソムニ感染症	1 1 1	1 5 1	1 0 1
●牛コクシジウム病と 乳頭糞線虫症 牛の消化管内線虫症	2 5	2 8	2 2

豚	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
<ウイルス病>			
豚インフルエンザ	1	1	1
豚ロタウイルス病	1	11	0
豚サーコウイルス関連疾病 (PCVAD)	11	20	19
<細菌・真菌病>			
サルモネラ症 (届出以外)	3	8	1
滲出性表皮炎 (滲出性皮膚炎、スス病)	11	16	9
増殖性腸炎	4	4	2
浮腫病	3	5	4
豚トウルペレラ (アルカノバクテリウム)・ピオゲネス感染症	1	1	1
豚クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症 (旧：豚壊死性腸炎)	2	6	6
豚胸膜肺炎	10	16	14

豚	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
豚大腸菌症	2	28	6
豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎)	9	27	27
豚マイコプラズマ病	2	2	2
豚レンサ球菌症	24	59	56
ヘモフィルス・パラシイス感染症 (グレーサー病)	9	19	18
<原虫・寄生虫病>			
豚コクシジウム病	1	1	0
豚鞭虫症	5	16	6
豚回虫症	3	18	18
<合併症>			
●豚ロタウイルス病と 豚大腸菌症	1	3	3
●豚サーコウイルス関連疾病 (PCVAD) と 豚増殖性腸炎 豚胸膜肺炎 豚胸膜肺炎、豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎) 豚大腸菌症、豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎) 豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎)、豚マイコプラズマ病 豚マイコプラズマ病 豚レンサ球菌症 ヘモフィルス・パラシイス感染症 (グレーサー病) 豚鞭虫症、豚回虫症	1 1 2 1 1 1 3 1 1	1 1 2 1 1 2 5 2 1	1 1 2 1 1 2 5 2 1
●豚トウルペレラ (アルカノバクテリウム)・ピオゲネス感染症と 豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎) 豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎)、豚回虫症 豚レンサ球菌症	1 1 2	1 1 2	1 1 1
●豚クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症 (旧：豚壊死性腸炎) と 豚レンサ球菌症 豚回虫症	1 1	1 1	1 1
●豚胸膜肺炎と 豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎) 豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎)、豚マイコプラズマ病 豚マイコプラズマ病 豚レンサ球菌症 豚回虫症	3 2 1 2 1	9 3 2 2 1	9 2 2 2 1
●豚大腸菌症と 豚鞭虫症	1	1	1
●豚パストツレラ症 (パストツレラ肺炎) と 豚マイコプラズマ病 豚レンサ球菌症	2 1	4 2	4 2

豚	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
豚コクシジウム病	1	1	1
豚回虫症	1	3	3
●豚マイコプラズマ病と ヘモフィルス・パラシス感染症（グレーサー病）、豚鞭虫症	1	1	1
●豚レンサ球菌症と 豚マイコプラズマ病 ヘモフィルス・パラシス感染症（グレーサー病）	1 1	1 5	1 5

鶏	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
〈ウイルス病〉			
鶏ウイルス性腱鞘炎/関節炎	1	1	1
鶏封入体肝炎	3	20	18
〈細菌・真菌病〉			
サルモネラ症（届出以外）	3	57	16
伝染性コリーザ	1	5	5
鶏クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：鶏壊死性腸炎）	4	12	5
鶏大腸菌症	80	2,632	2,267
鶏ブドウ球菌症	11	27	23
鶏ポツリヌス症	1	5	5
鶏アスペルギルス症	3	24	24
〈原虫・寄生虫病〉			
鶏コクシジウム病	36	199	79
〈合併症〉			
●鶏貧血ウイルス病と 鶏コクシジウム病	1	10	10
●鶏封入体肝炎と 鶏大腸菌症	1	2	2
●鶏クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：鶏壊死性腸炎）と 鶏大腸菌症 鶏大腸菌症、鶏コクシジウム病 鶏コクシジウム病	1 1 11	2 2 119	2 2 117
●鶏大腸菌症と 鶏ブドウ球菌症 鶏ブドウ球菌症、鶏コクシジウム病 鶏アスペルギルス症 鶏コクシジウム病	3 1 2 2	5 6 6 11	4 3 6 11
●鶏ブドウ球菌症と 鶏コクシジウム病	1	5	5
●鶏コクシジウム病と 鶏クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症（旧：鶏壊死性腸炎）	1	3	3

その他の家畜	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
〈馬〉			
馬ロタウイルス病	1	1	1
ロドコッカス・エキイ感染症	18	20	20
〈めん羊・山羊〉			
リステリア症（めん羊・山羊）	1	1	1
〈犬〉			
レプトスピラ症（犬、届出以外）	1	1	1

2 中毒・代謝病等発生状況

牛・豚・その他の家畜	年累計		
	発生戸数	発生頭羽数	死廃頭羽数
〈牛〉			
硝酸塩中毒	4	7	7
低マグネシウム血症	1	1	1
分娩性低カルシウム血症（乳熱、産前・産後起立不能症）	41	59	27
ケトosis	9	9	2
尿石症	20	20	20
ルーメンアシドーシス	8	8	8
大脳皮質壊死症（ビタミンB1欠乏症）	11	11	8
脂肪壊死症	3	3	3
ビタミンA欠乏症	35	38	10
白筋症	1	1	0
銅中毒	1	1	1
セレン及びビタミンE欠乏症（豚）	1	3	0
〈豚〉			
尿石症	1	1	1
食塩中毒	1	3	1
〈鶏〉			
尿石症	1	1	1
〈めん羊・山羊〉			
尿石症	2	2	2
銅中毒	1	1	1
〈牛〉中毒・代謝病等の合併症			
●低マグネシウム血症 分娩性低カルシウム血症（乳熱、産前・産後起立不能症）	1	1	0

☆動物用医薬品再審査結果通知

製剤名	申請会社名	承認日	期間終了	再審査結果 通知番号	再審査結果 通知日	備考 (当該再審査が 係る承認事項)
ピシバック 注 イニエ+イ リド	共立製薬株式会社	H28年11月2日	R4年11月1日	4 動薬第2710号	R8年3月18日	—
アレルミューンHDM 0.1	日本全薬工業株式会社	H26年4月7日	R2年4月6日	2 動薬第865号	R8年3月18日	—
アレルミューンHDM 0.5	日本全薬工業株式会社	H26年4月7日	R2年4月6日	2 動薬第866号	R8年3月18日	—
アレルミューンHDM 1	日本全薬工業株式会社	H26年4月7日	R2年4月6日	2 動薬第867号	R8年3月18日	—
アレルミューンHDM 2	日本全薬工業株式会社	H26年4月7日	R2年4月6日	2 動薬第868号	R8年3月18日	—
アレルミューンHDM 5	日本全薬工業株式会社	H26年4月7日	R2年4月6日	2 動薬第870号	R8年3月18日	—

通信

先日、一年目で入社された皆さんと交流を持つ機会がありました。しっかりと自分の考えを述べ、高いポテンシャルを感じさせてくれる機会でもありました。また、最近異なる分野から職場に来られた方も、素早く適応できるようになっていると感じます。その場その場のオーダーメイドの職人的な対応から、マニュアル化された対応が増えている面もあるのかもしれませんが、あたふたばかりしていたあの頃の自分が恥ずかしくなる思いです。

こうした人材が来てくれたのであれば、しっかり花開かせることができるかは上司や先輩の腕の見せ所でもあります。期待をかけて接すると部下の成績や能力が向上するピグマリオン効果、逆にあまり期待せず接すると成績や能力が低下するゴーレム効果などどのように対応するかで個人の成績だけでなく、職場全体のパフォーマンスも変わってくると考

えられます。一律での正解はなく、それぞれの職場に適したものを模索する必要がありますが、その基礎となるコミュニケーションをとりつつ、それぞれの立場の方がそれぞれにできることに意識を持ち、実行していくことが、家畜衛生の向上のためにも望まれます。

毎週月曜日発行

家畜衛生週報

編集・発行：農林水産省消費・安全局
畜水産安全管理課、動物衛生課

☎03(3502)8111 内線 4581

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1